フィリピン共和国ルソン島 8 日間調査記　人文科学研究所総合研究旅行

堀江　洋文

2019 年 12 月 24 日夕方、人文研総合研究旅行参加者を乗せたフィリピン航空 427 便は、同航空国際線が主に発着するマニラのニノイ・アキノ国際空港第 2 ターミナルに到着した。隣の第 3 ターミナルは、フィリピンのセブパシフィック航空が主ターミナルとして使い全日空等も乗り入れるが、建設に当たっては竹中工務店が工事を請け負うも、フィリピン政府による強制収用や訴訟問題等で当初の予定から 12 年遅れの 2014 年に全面供用が開始された曰く付きのターミナルである。これまでもマニラの空港の悪評はいくつも聞いていたし、6 年程前の筆者にとって初めてのマニラ旅行の時も褒められた状況ではなかったので、ほぼ定刻に到着後、入国審査と通関を問題なく済ますことができて安堵した。

マニラは既存のニノイ・アキノ国際空港の 4 つのターミナルの改修だけでは増え続ける乗降客数に対応できず、現在マニラの北にある 2 つの空港の整備、建設を進める計画を持つ。そのうちの 1 つ、マニラ首都圏の北に位置するブラカン州では、サンミゲル・コーポレーションが新マニラ国際空港計画を進め、空港運営のノウハウを得るため韓国の仁川国際空港公社との提携を計画している。財閥サンミゲルは、その傘下のビールメーカーであるサンミゲル・ブリュワリーに日本のキリンビールが 50%弱出資していることからも、日本人には耳馴染のある名前である[1)]。もう 1 つの国際空港整備計画は、後述するかつて米空軍のクラーク空軍基地を引き継いだクラーク国際空港である。ニノイ・アキノ国際空港の運営提携先であるシンガポールのチャンギ国際空港が、クラーク国際空港の運営協力も行うことになる。アジアの空港公社の協力を得て、どちらの空港がマニラ北部に位置する空港として主導権を握るのか、これから目が離せない。マニラからの距離だけでなく、空港へのアクセスが成否を分ける要因となるであろう。

24 日夜から 28 日朝まで中央銀行近くのセンチュリーパーク・ホテルに宿泊する。同じフロアに韓国からの団体客が宿泊し、部屋のドアを開けての宴会の騒音に筆者は数日間悩まされることとなる。フィリピンには年間 3000 万人以上の外国人観光客が訪れるが、フィリピン観光省の最近の統計では、2019 年 1 月から 10 月までにフィリピンを訪れた観光客で数が一番多かったのは約 161 万人の韓国人で、2 位の中国人や 3 位米国人を引き離し、日本人観光客は韓国人観光客の約 3 分の 1 の約 57 万人であった。セブ島のみならずルソン島でも韓国人観光客の存在は顕著であり、歩いているとしばしば現地の人に「アニョハセヨ」と挨拶される。この国における日本人の存在感が徐々に薄れてきていることを、フィリピン滞在中身をもって感じ

ることとなる。ところで今回の調査旅行地ルソン島は、6 千万人が居住しフィリピン経済の 7 割以上を担っている。特に人口、経済ともにマニラ首都圏への集中は言うまでもない。

旅行 2 日目は、円借款によって建設された南ルソン高速道路をマニラ市内から南に下る。並行してフィリピン国鉄の軌道が走るが、ガイドさんの話しでは殆ど列車の運行はないようである。かつてはマニラのチャイナタウンの北にあるトゥトゥバン駅からフィリピン国鉄南方線でビコル地方のナガやレガスピまでビコル・エクスプレスが走っていたが、台風の被害等で運行が中止されてからは、現在どのような状況になっているのか不明である。マニラから北に行く北方線は、1991 年のピナツボ火山の爆発の影響で廃線となったが、新聞報道等では、現在日本の協力もありマニラの北と南を結ぶ南北通勤鉄道（North South Commuter Railway）の計画が進行中である。これは、北はクラーク国際空港からマニラのトゥトゥバン駅を通過して、南は 2 日後に訪れるカランバを結ぶもので、初めてマニラ近郊の国際空港とマニラ市内が鉄道で結ばれることになる。上記のクラーク国際空港と新マニラ国際空港の競争では、前者を有利に導くインフラ建設となるかも知れない。

バスからは、途中左手にラグナ湖（別称バエ湖）を見下ろすことができるが、同湖には有機物が多く養殖に適しているためか、ティラピア等の魚を養殖する設備が目に入る。遠く高速道路から湖面を眺めても、浅い湖であることがわかる。高速道路を途中のサンタ・ローサで降りて、目的地のタガイタイに向かう。タガイタイからタール湖に浮かぶ小さな活火山タール火山をのぞむ風景は風光明媚で知られ、今日マニラからの観光コースにもなっているが、フィリピン名物の渋滞に加え、ルソン島の南ビサヤ諸島を横断しつつあった台風 29 号（フィリピン名は「ウルスラ」）の影響による雨と靄で、予定の行程をこなせない。タール火山は、我々の帰国後 1 月 12 日に突然大噴火し、マニラ国際空港でも離着陸が中断されるなど、メトロ・マニラやパタンガス等の周辺地域に大きな影響を及ぼした。結局、タール湖やパタンガス州を一望することができるピープルズ・パークには行けず、タガイタイの西の山中にあるカレルエガ教会を訪れるにとどまった。カレルエガ教会はドミニコ修道会の教会であるが、修道会の創始者である聖ドミニコ（St. Dominic de Guzmán）の出生地であるカレルエガの町に因んで名づけられた。カレルエガはスペインのブルゴスの南に位置する小さな町である。結婚式に使われることも多く、南方の木々が茂る敷地は、礼拝の他に静養やキャンプに使用されることもある。スペインにおいて異端審問を主導した同修道会を連想し比較すると、ここはいたって開放的でリゾート感満載の教会である。我々の到着時はちょうどクリスマスのミサが始まる前で、教会は入口まで熱心な信者で溢れ会堂内に入ることができないほどの満杯状態であった。

マニラに戻る途中に、マニラ湾の南のカビーテにあるフィリピン独立宣言の地アギナルドシュライン及び博物館に立ち寄る予定であったが、クリスマス休みで休館とのことであった。

ここは、1898 年にエミリオ・アギナルドがスペインからの独立を宣言した地である。今回の総合研究旅行期間は 12 月 24 日から 31 日までの 8 日間であったが、カトリック国フィリピンはクリスマスから新年にかけて休暇モードに入る。加えて 30 日はフィリピン独立の雄ホセ・リサールの記念日で祝日となっており、当初予定していたフィリピン大学訪問を含め、いくつかの施設の訪問を中止せざるをえなかった。学術調査にはあまり適した時期ではなかったが、その中で代替の訪問地を探すことになった。エミリオ・アギナルドは 1899 年に建国されたフィリピン第一共和国の初代大統領に就任するが、アメリカはこれを認めず、結局短期間で終焉する米比戦争を経てアメリカによるフィリピン植民地化が進められる。フィリピンにとって不幸であったのは、当時の米国大統領が、米国をハワイ併合や米西戦争に導く帝国主義政策を採ったウィリアム・マッキンリーであったことであろう。米西戦争中はアギナルド等の独立派（共和国派）を支援するが、戦争後は独立派を弾圧しフィリピンの植民地化への道を走った米国政府の政策は、ハワイ併合とともに米国史における汚点として数えられる。米国内でも、クリーヴランド元大統領やマーク・トウェイン等による米国反帝国主義連盟の運動はあったが、マッキンリーの勢いにかき消されてしまった感がある。米国には反乱軍と見なされたが、スペインに対し原住民の革命軍を率いて独立を勝ち取ったアギナルドが、建国の英雄としてリサールのような評価を得られなかったのは何故であろうか？それは、20 世紀に入って米国が作った近代フィリピンの歴史解釈のなかで、米国と戦ったアギナルドは冷遇されてきたことが一番の原因として挙げられる[2)]。

ガイドさんによると、現在もフィリピン人の多くは、スペインの植民地支配をこき下ろすが、その後フィリピンを支配したアメリカに対しては、教育や自由といった当時のフィリピンになかったものを教示したとして評価する声が多いとのことである。しかし一方で、左派のフィリピン人歴史家レナト・コンスタンティーノの言説にも説得力がある。彼によると、不幸にもフィリピン人は、アメリカの宣伝、即ちアメリカ人が来たのはフィリピン人を教育するという愛他的目的のためであり、さらにフィリピン人にはまだ自治能力がなかったのでアメリカの支配と指導を自ら欲したという都合のいい解釈を鵜呑みにしてきた。コンスタンティーノは、アメリカの支配に対して実質的な抵抗運動はなかったとするようなアメリカ側の宣伝工作を批判し、フィリピン人がスペインから獲得した独立を奪い取ったアメリカとの戦いは、スペインとの闘いよりも長く続いたのであり、スペインに抵抗した革命とアメリカとの戦争は、別々のものでなくフィリピンの反植民地闘争という 1 つの歴史的局面を構成すると解説する[3)]。スペインと対峙したリサールと、アメリカと戦ったアギナルドの評価の違いは、このような歴史的背景から説明できるかもしれない。

アギナルドシュラインの代替訪問地として挙がったのが、戦後渡辺はま子が歌った「あゝモ

ンテンルパの夜は更けて」で知られるモンテンルパ市のニュービリビッド刑務所である。モンテンルパは、ちょうどタガイタイからマニラに帰る途中にあり、太平洋戦争中は主に米軍捕虜の収監や彼等の日本への移送前の収容に使用された。戦後は日本軍の BC 級戦犯の収容に使われ、山下奉文第 14 方面軍司令官も一時ここに収監されている。終戦前後の混乱の中で間違った情報による冤罪の疑いも一部にあったと伝えられるが、同刑務所では 17 名が処刑されている。その後、助命嘆願の動きもあり、1953 年には、当時のフィリピン大統領エルピディオ・キリノ（Elpidio R. Quirino）が、フィリピン国民の間に根強く残る反日感情にも拘らず、105 名の戦犯に恩赦を与えている。日本兵の慰霊碑のある場所は、正門から刑務所をぐるっと回った裏側にあり、小さな裏門の鍵を開けてもらっての訪問となった。モンテンルパ世界平和祈念公園と称された一角は決して広くはないが、それなりに整備はされている。ガイドさんによると、米兵の墓地はハワイのパンチボール国立墓地のようにりっぱな墓地であるとのことであるが、パンチボールの美しさを知る身としては、その発言はやや大袈裟としても、隅に追いやられた日本兵慰霊碑との違いはそのような例えがよく当てはまる[4]。

3 日目の 26 日は、マニラ市内で調査を行う。最初に朝のサンアンドレス市場に出かけ、市場のあるマラテ地区の買い物状況や台所事情を垣間見る。数年前に訪れたことのあるマニラ最大級の市場バクララン・マーケットと比べると、規模の上でも活気においても小ぶりであるが、この市場には落ち着きとともに若干の高級感がある。次にホセ・リサールのモニュメントを訪れる。リサールはスペインに対する独立運動の英雄であるが、革命結社カティプナン（シンボルマークは KKK）による 1896 年革命が始まると、当時滞在していたバルセロナでの逮捕後フィリピンに送還され、反乱、扇動、違法結社の容疑で同年 12 月に軍法会議後銃殺されている。リサールは、知識人中心の非暴力組織「フィリピン同盟（ラ・リーガ・フィリピーナ）」を結成したが、カティプナンの武力闘争路線を支持したわけではない。しかし、カティプナンのメンバーからは革命指導者として尊敬を受けていた。リサールの処刑地は、リサール公園内でモニュメントの北側に位置するが、今日では処刑地としての痕跡は何も残っていないとのことである。

リサール・モニュメント視察を終えると、各国の VIP が宿泊してきたマニラ・ホテルでトイレ休憩。マルコス大統領時代までは各国首脳はこのホテルに宿泊したそうであるが、最近は、例えばトランプ米大統領や数年前に当時の天皇皇后両陛下がマニラで宿泊したのは、マニラ湾に面したソフィテル・フィリピン・プラザ・マニラである。マニラ・ホテルを出ると、この日の調査の中心地であるスペイン統治期の城塞都市イントラムロスに向かうが、途中のアンダ・サークルの真ん中に建つ、かつてスペイン総督（Gobernador-General de las Filipinas）を務めたシモン・デ・アンダ（Simón de Anda y Salazar）のモニュメントを道端から撮影する。バ

スク人アンダは、1762 年のマニラの戦いにおいて、攻め込む英国軍に対してマニラの北に位置するブラカンに陣を構え最後まで抵抗したことで知られる。マニラの戦いはヨーロッパにおける 7 年戦争、アメリカ大陸でのフレンチ・インディアン戦争の一連の流れの中で戦われた戦争で、講和条約であるパリ条約によってマニラはスペインに返還されているが、数年間はスペインの支配を離れ英国が占拠していた。

イントラムロスのサンティアゴ要塞に入る前に訪れたのが、1820 年代に建てられ今は廃墟となっているかつての税関（Aduana）の建物の前にあるメキシコ広場（Plaza Mexico）である。パッシグ川に面したこの公園には、1565 年から 250 年にわたり、ヌエバ・エスパーニャとマニラ間で太平洋交易に貢献したマニラ・アカプルコ・ガレオン船を記念する碑がある。元々太平洋のガレオン船貿易は、スペイン本国のセビリア及びカディスを起点としヌエバ・エスパーニャとの間を結ぶ交易船のネットワークから派出したもので、毎年船団を組んでアメリカに航海していたガレオン船を統括するために、船舶、貨物、装備、兵器、船員を管理するシステムが構築されていた。このような大西洋の船団と太平洋を渡るマニラ・アカプルコ・ガレオン船を管轄下に置いたのが、1503 年にイサベル 1 世によって設立され様々な許認可権を保持して関税や出入国管理といった外国交易に関する権限を牛耳ってきた通商院（Casa de la Contratación de las Indias）であった。1717 年に通商院がセビリアからカディスに移転されると、セビリアが握っていた新大陸との交易独占権をカディスは獲得することになる[5]。一方、バスク人のアンドレス・デ・ウルダネータによって創始されたこの太平洋のガレオン貿易は、絹や銀といった交易物を運び中国をはじめ近隣諸国にも大きな影響を与えたが、同時にスペイン或いはヌエバ・エスパーニャからの宣教師をもフィリピンに運び、同島のキリスト教伝搬に大きく貢献している。ガレオン貿易は、メキシコの独立まで続けられるが、フィリピンと宗主国スペインを結ぶ無二の手段であった。その後 19 世紀になってもフィリピン経済が浮揚しなかった背景には、2 世紀以上に及ぶガレオン貿易への過剰な依存が、フィリピン経済の潜在性を引き出そうとする動機付けを奪ったとも言えよう[6]。

次にスペイン統治時代のシンボル的建造物であるサンティアゴ要塞を訪れる。サンティアゴ要塞門には、ムーア人を足蹴にするサンティアゴ（聖ヤコブ）の騎馬像のレリーフが彫られている。門をくぐると、ホセ・リサールが処刑まで収監されていた場所があり彼の記念館もあるので、リサール色が溢れている。スペインの植民地支配に対する遺恨の表現かと思いきや、さらに進むと、太平洋戦争末期の 1945 年 2 月末に、パッシグ川の水面下に位置する地下牢に閉じ込められ満潮時に約 600 人のフィリピン人が水死させられた地下牢がある。近くに建つ十字架の墓標には日本軍の残虐行為への言及があり、この残虐行為は永遠にフィリピン人の心に生き続けると記されている。日本軍によるシンガポール占拠直後に行われたシンガポール市民へ

の残虐行為に対し、華僑が中心となって建てた 68 メートルに及ぶ高さの「日本占領時期死難人民記念碑」と比べると、サンティアゴ要塞の十字架の碑は実にこぢんまりとした記念碑であるが、記されている言葉は同じく厳しい。

植民地支配の功罪の議論は別として、昨年の総合研究旅行の調査地台湾では、50 年に及んだ日本の統治の負の部分だけでなく、その期間のインフラ整備等評価されてきた部分も垣間見ることができた。それができたのは、日本の台湾統治では、そのような事業を本格的に行うに十分な時間が与えられたからである。それに対してシンガポールやマニラにおける日本統治時代は、民間交流の長い歴史はあるが、国として統治に関与したのは太平洋戦争のわずかの期間であり、地元社会に教育やインフラ整備で協力するどころか、戦争という極限状況の中で、統制を失った日本軍が残虐行為に至ったことは、強く断罪されてしかるべきである。ただし、マニラの攻防戦に関しては、虐殺や婦女子に対する暴行等大方の責任は日本軍にあるとしても、住民がいることを承知でマニラ市街戦時に市内に重砲火を浴びせ、多数の死傷者を生み出した米軍の責任を指摘する声もある。しかし、そのような指摘についても、無防備都市宣言によってマニラを放棄することをためらった大本営を含む日本軍にその責任の一端があることは明らかである。戦後まもなくフィリピン人の間で日本に対する憎悪がいかに激しかったかは、永井均氏の著書が明らかにしている[7]。しかし、今日フィリピンを訪れても、戦時中、特にマニラ市街戦の時の日本軍による残虐行為の話しを聞くことは少ない。以前訪れたシンガポールのチャンギで、戦時中の日本軍の残虐行為を地元民から何度か聞かされたことを思うと少々拍子抜けである。両国民に政治的且つ精神的和解が成立しているのか、単に記憶が風化してしまっただけなのかはわからない。1962 年の皇太子夫妻（現上皇夫妻）のフィリピン訪問が反日感情の緩和に寄与したとの見解もあるが、その真偽は不明である。

日本統治期と言えば、『マニラ新聞』の発刊に言及しておこう。昭和 17 年 10 月 20 日の「南方陸軍軍政地域新聞政策要領」に基づき、朝日新聞社の『ジャワ新聞』や読売報知の『ビルマ新聞』に先立って、東京日日新聞社（現在の毎日新聞社の前身）が設立したマニラ新聞社によって昭和 17 年 11 月 1 日に発刊された『マニラ新聞』は、陸軍省の統制下で大東亜共栄圏の文化工作を積極的に担うことになった。同紙は初刊の一面においては、「軍政の徹底浸透化に挺身せん」とフィリピン印刷文化の統合主体であることを高らかに謳い、「皇道宣布の大使命完遂」といった勇ましい言葉が躍る[8]。

サンティアゴ要塞の 2 階部分からパッシグ川を挟んで対岸のチャイナタウンの方向を見ると、一部に高層ビルが建ち以前訪れた時と比べ町が近代化した様が見て取れる。当時は近代建築やショッピングセンターといえば、スペイン系（バスク地方アラバ県をルーツに持つ）のアヤラ財閥によって進められていたマカティのアヤラ・センターや SM グループによる SM モール・

オブ・アジアが目立った程度であったが、その後のマニラ市の高層化には目を奪われる[9]。スラムから眺める高層ビル群は夜空に一段と映え、逆に貧富の差を意識させられる。要塞内にあるリサール記念館を見学し、次の見学場所サン・アグスティン教会に向かう。

1863 年の地震でマラカニアン宮殿に機能が移転されるまではスペイン総督公邸であった Palacio del Gobernador とマニラ大聖堂前のローマ広場に挟まれた道を通って、「フィリピンのバロック様式教会群」として 1993 年に世界遺産に登録されたこのアウグスティヌス修道会の教会に到着する。世界遺産には 4 つの教会が登録されたが、今回の旅行でそのうちの 3 つを訪れることとなる。サン・アグスティン教会は 1599 年から 7 年ほどかけて建設された教会であるが、最初の展示室でスペイン初代総督レガスピやウルダネータの活躍を物語る展示を見た後、修道院の回廊を通って礼拝堂に入る。礼拝堂ではちょうど洗礼式が行われていたが、祭壇左のレガスピの像が横たわる小さな礼拝室を訪れる。礼拝堂を後にして再び回廊に出ると、カラヴァッジョの絵画でも有名なローマのサンタ・マリア・デル・ポポロ教会等世界のアウグスティヌス修道会の諸教会に関する展示が続く。

次に、サン・アグスティン教会を出て、道を渡ったところにあるカーサ・マニラ博物館を見学。スペイン統治時代を彷彿させる建物と調度品の展示を見て回り、開け放たれた窓からはマニラ大聖堂の屋根が見える。続いてカーサ・マニラ近くの菲華歴史博物館（バハイ・チノイ）を訪れる。フィリピンに移り住んだ華僑の歴史や風俗習慣の展示を見て、この国に溶け込んだ華人の姿が印象に残る。メスティーソ（Mestizo）というと普通混血全般を指すこともあるし、ヌエバ・エスパーニャではスペイン人とインディオの混血を指す場合がほとんどであるが、スペイン人の絶対数が少なかったフィリピンでは、華人とフィリピン先住民の混血を指す場合が多い。彼らは、特にメスティーソ・デ・サングレイ（Mestizos de Sangley、あるいは単にサングレイ）と称される。その点からも、華僑のフィリピン社会への定着ぶりが指摘できる[10]。スペイン統治時代のフィリピンでは、メスティーソは基本的にマニラ地域に居住していた。聖職者や一部官僚を除けば、地方に居住するスペイン人は殆どいなかったからである。マニラにおいてもフィリピン女性は、スペイン人の妻となるよりは妾として囲われることが多かった。非スペイン人との結婚は社会的、経済的利益に繋がらないことから、スペイン人男性は同じスペイン人の女性との結婚を好む傾向があった。しかし、本国からの距離的問題もあり、スペイン人女性の数はかなり少なかったと言えよう。それ故、1611 年にマニラにおいて女子修道院の設立が決まった時には、まだ独り身のマニラ在住スペイン人男性から強い怒りが示されている[11]。既に 10 世紀頃から中国本土の商人達がフィリピンで交易に従事していたと伝えられるが、展示では、その後のスペインやアメリカによる植民地時代にどのように華人社会がフィリピンに同化していったかが記されていた。展示の最後には、華人系の歴史博物館にはお決まりの太平

洋戦争期の抗日運動の模様が解説されていた。

菲華歴史博物館見学後は、バスでパッシグ川にかかるジョーンズ橋を渡り、チャイナタウン（ビノンド地区）の入口親善門をくぐる。元々中国商品市場兼中国人居住区であるパリアン（Parian）は、ジョーンズ橋を渡る前のパッシグ川左岸のアロセーロス地区に位置したが、18世紀末に当時のフィリピン総督ホセ・バスコ（José Basco y Vargas）によって移転させられている。一方 1594 年に、パリアンとは別に中国人カトリック教徒やメスティーソのための居住地として設定されたのがビノンド地区であり、ドミニコ会が司牧にあたっていた[12)]。ビノンド地区では、まず親善門から延びる道路の突き当りにあるビノンド教会で調査を行う。この教会は、1596 年にドミニコ会の僧侶によって建てられたマニラ在住華僑のための教会である。マニラで一番裕福な教会は結婚式等が多いサン・アグスティン教会であるが、ここビノンド教会も華人系の教会であることからお金には困らない教会と聞く。中国人の父とフィリピン人の母を持ついわゆる華人系メスティーソとしてこの教会で育ったロレンソ・ルイスは、その後 1637 年に長崎で殉教し、長崎 16 聖人の一人として 1987 年にローマで列聖されている。彼は、フィリピンで最初に列聖された聖人であった。チャイナタウンのメイン・ストリートである教会前のオンピン通りを進むと、ビノンド教会の裏の路地の入口に小さな十字架の祠がある。十字架は花で飾られ、その前にはたくさんの線香があげられていた。いかにも中華街にある祠であるが、シンクレティズムにうるさい厳格な宣教師は目を丸くするであろう。十字架がなければ、媽祖の小さな廟かヒンドゥー教の道角の祠の雰囲気がある。オンピン通りは中華街であるが、横浜

ビノンド教会正面

中華街のような華やかさや清潔感はなく、観光客が押し寄せる雰囲気でもない。薬局や普通の電気屋さんも店を出して、華僑の子孫である華人やメスティーソのための商業地区というのが、オンピン通りの第一印象であった。18 世紀半ばに非カトリック教徒の華人は一斉追放の憂き目にあい、マニラを中心に中国人移民社会が大きくカトリック化するきっかけとなった。中国人はカトリック教会に認知された現地女性と結婚し、華人系メスティーソを産み出す母胎となった[13]。これら華人系メスティーソは、19 世紀半ば以降スペイン領フィリピンにおける有産知識層としてフィリピン人の国民意識の形成に大きな役割を果たし、延いては国家フィリピンの形成にも大きな影響を与えた。こうして華人社会は、かつての非カトリック教徒を中心とし単身者からなる出稼ぎ型の社会から、カトリック教徒の既婚者を中心とした定住型社会に変容したのである[14]。

ビノンド地区を離れ、庶民の集まるキンタ・マーケットやキアポ教会をバスの窓から確認する。ブラック・ナザレ像で知られるキアポ教会はクリスマスのミサの途中で、多くの信者でごった返していた。1 月 9 日のブラック・ナザレ祭の混雑はこれどころではないと聞かされて、フィリピンのカトリック信者の信仰心を垣間見た瞬間であった。バスはキアポ教会を右に見ながらメンドサ通りを南に下り、再度パッシグ川を渡るところで左手にイスラム教寺院マニラ・ゴールデン・モスクの細長い尖塔と丸いドームが見える。モスクの周辺はイスラム教徒の居住区でもある。フィリピンのイスラム教徒と言えば、多くがミンダナオ島、スール一諸島、パラワン島といったフィリピン南部に居住しているが、ここメトロ・マニラのイスラム教徒人口もかなり多い。前回のマニラ訪問時にこのモスクのハラムに入ったことがあるが、女性信者は全く見られなかった。ガイドさんによると、このモスクは女性の入場が禁止されているとのことである。男女の礼拝場所ははっきりと分けられていたが、ハラムの中で女性の礼拝も認められ多くの女性が座っていたダマスカスのウマイヤ・モスクとは、明らかに違った雰囲気のマニラのモスクであった。ミンダナオ島等のフィリピン南部へキリスト教徒を入植させる政策や、ミンダナオ紛争の長期化によって、押し出されたイスラム教徒がマニラにやってきたという政治的背景もある[15]。

スペイン人はフィリピン南部に住むイスラム化した人々を「モロ」と呼び、米国統治期も植民地政府はモロを後進的未開民族とみなしてきた。そのような米国植民地政府にとっては、モロ問題は第 1 義的に南部の治安問題であった。それに対し、フィリピンのムスリムは未開な野蛮人ではなく、法や社会制度を取ってみても、イスラム文明に基礎を置く高度な文化を持つ人々であり、教育を通じ彼らを良き市民に育て上げるべきであると主張するナジブ・サリービー等の研究も見られる。また、米国統治期の文明化論政策と共通項を持ち、さらに近代化論からも影響を受けて、フィリピン南部の近代化とそのための政府援助、ムスリムに対する差別撤廃を

提唱するグループもあった。しかし、1970 年代にモロ民族解放戦線（MNLF）が、南部の分離独立を要求して武力闘争を始めると、上記のような近代化論的アプローチの失敗が指摘されるようになった[16]。

雑踏のキアポから次に向かったのが、国立人類学博物館である。フィリピンの伝統的衣装や民芸品等フィリピンの民俗学の歴史を紹介する博物館であるが、滞在時間が限られていたので、昔フィリピンで言語表記のために使われていたバイバイン（Baybayin）と呼ばれる文字とその碑文の解説コーナーや、ミンダナオ島に居住するオーストロネシア系語族のルマド族の展示コーナーで時間を取った。その後、一部の参加者を人類学博物館に隣接する国立自然史博物館に残し、本隊は、パコ公園近くにある高山右近立像の見学に向かった。パコ公園の近くに、交通量の多い道路に囲まれ日比友好を謳ったディラオ広場（Plaza Dilao）というアクセスのよくない広場があるが、この閑散とした広場に右近の立像がある。立像の後ろには高架道路や国鉄南方線が走り、人通りのほとんどない殺風景な場所に建つ立像を見ると哀れにも感じる。昔の写真を見ると、高架道路はなく、立像の後ろには瀟洒なパコ駅が建ちそれなりの駅前広場の様相を呈していた。都市計画の一環とは言え、あまりの惨めさに移転も含め何とかならなかったのかと思う。淡い夕日の中に浮かび上がる立像のシルエットは哀愁さえ漂わせる。日本からの追放後、イエズス会のマニラ管区長バレリオ・デ・レデスマ（Valerio de Ledesma）の受け入れもあって 1614 年にマニラに到着した右近であったが、スペイン総統フアン・デ・シルバ（Juan de Silva）の大歓迎を受け、葬儀はイントラムロスの中のイエズス会系サンタ・アナ教会で盛大に行われ埋葬されたことを考えると、右近像の現状には納得がいかない。右近像見学からホテルに帰る途中、エルミタ地区にあり「アジア最高の小書店」とも称されるソリダリダ書店に立ち寄る。連帯とか団結の意味を持つ書店名から、さぞ左翼系の書籍で一杯の本屋さんかと思いきや然にあらず。店自体は大きくはないが、アテネオ・デ・マニラ大学出版局発行の歴史書も多く、フィリピンに関する興味をそそられる書籍が数多く書棚に並んでいた。ところでフィリピンの大学と言えば、フィリピン国立大学の他に、私学の雄アテネオ・デ・マニラ大学、カトリック系のラ・サール大学やサントトマス大学が名門大学として知られる。

27 日は、マニラの南東 100 キロほどのところにあるパグサンハンに向かう。その途中、森林保護や探鳥でも知られるマキリン山を前方に見ながら、ロス・バニョスの町を通過。この町にあるフィリピン大学ロス・バニョス校の自然史博物館を訪問する予定であったが、クリスマス休日で大学はすべて閉鎖されていたため、パグサンハンに直行した。この自然史博物館の近くに、平成 28 年 1 月末にフィリピン訪問をされた当時の天皇皇后両陛下が立ち寄られた国際稲研究所（International Rice Research Institute）がある。コッポラ監督の映画「地獄の黙示録」のロケ地でも知られるパクサンハンには、ラグナ湖に流れ込み急流下りで有名なパクサンハン

川ある。急流下りはスペイン植民地時代から知られていたらしいが、船頭職は今日では地元民の副業となっている。この時期は客も少ないとのことであるが、実際我々の小舟についた 2 人の船頭も、普段は漁業とサイドカー・タクシーの運転で生計を立てているとのことである。船頭希望者も多いため、この時期は月に 2 回くらいしか舟の仕事にありつけないとやや不満げに話していた。パクサンハンから少し東に入ったところに、上記両陛下が国際稲研究所を訪問する前に供花したカリラヤの「比島戦没者の碑」がある。マニラへの帰路の途中、マニラ戦犯裁判で死刑判決を受けた山下奉文と本間雅晴の処刑地が山の方にあり、ガイドさんがその方向を指さしてくれた。ロス・バニョスを通過した頃にバスを止め、この地の名物ブコパイ（buko pie）を買いに走る。ブコパイは、ココナッツのカスタードパイのようなもので、有名店らしく店には長い行列があった。続いて、終戦直後、降伏した日本兵が一時収容された収容所のあるカランバに到着。カランバ訪問の目的は、ホセ・リサールの生誕地であるホセ・リサール記念館の見学である。リサールはこの地に 1861 年に生まれたが、現在の建物は当時のスペイン・コロニアル・スタイルの家を再建したものである。マニラへの帰途は、両側に三期作の水田地帯が続く。田植えの隣で稲刈りというのも珍しくない光景と聞く。

28 日、マニラから空路ルソン島北部の北イロコス州ラワグに到着する。イロコス州はルソン島の北端とはいえ、スペインの影響も残り、取り残された僻地という様相はない。風力発電でも知られ、州の電力はほぼ風力でまかなっているようである。それでも、この地域からは米国やオーストラリアに多くの移住者が海を渡ったと聞く。米国では現在カリフォルニア州にフィリピン人移民が最も多く居住するが、長い間ハワイも有力な移住候補地であった。パールハーバーの西に位置するカポレイ地区のフィリピン・コミュニティ・センターでの聞き取り調査では、ハワイへの移住は特に 20 世紀に入ってから活発となり、当初は特にイロコス州やビサヤ諸島からの移民が多かったようである。その後は、マニラやマニラ周辺地域からの移民が増加する。カポレイは、日本人やフィリピン人等の移民が砂糖キビ畑や製糖工場で働いた地域で、当初は独身男性の就労が多かった。

ラワグ到着後まず訪れたのが、空港から南に下ったバタックにあるマルコス博物館である。当然のことながら、博物館は独裁者マルコスの生涯と業績を称えるパネルや展示で溢れていた。かつて亡命先のハワイからこの地に戻されたフェルディナンド・マルコス元大統領の遺体が安置されていたのが、この実家の敷地内にある霊廟である。バタックにはかつては多くの観光客が訪れ賑わったようであるが、遺体は 2016 年ドゥテルテ大統領によってマニラ近郊の英雄墓地に埋葬されている。北イロコス州にはマルコス家の影響が今も強く残っており、現在の知事はマルコスの長女が務め、マルコスの長男フェルディナンド・マルコス Jr.も上院議員になる前はこの知事職にあった。彼は 2016 年フィリピン大統領選挙で副大統領候補として立候補する

も敗北。イロコス州を中心に、マルコスは下層階級の人々の間で現在も絶大な人気がある。メトロ・マニラ以外は給与が低いこの国では、12 月に 2 か月分の給与が支払われる。いわゆる 13 月給与（13th month pay）であるが、カトリック国のフィリピンではクリスマス・ボーナスの位置づけである。正確には一年間に支払われる基本給の 12 分の 1 の金額を 12 月 24 日までに社員に支払う義務がすべての会社にあるわけであるが、給与が 1,000 ペソ以下の社員という限定はあるものの、このような給与を創設したのは他ならぬマルコスであった。その後、コラソン・アキノ大統領によって 1,000 ペソ以下という制限を取り払い、すべての社員に支払われることになる。そのため、クリスマス期には多くの国民が持ち金を使い果たし、クリスマス後は金欠に苦しむ家庭が多いようである。元々給与を貯蓄せず消費に回す国民性を持つフィリピン人であるが、知人間の貸し借りや高利で貸金業者からお金を借りる人も多く、一方正規の銀行融資を受けられる人は限られると言われる。

次に、少し北に戻ってパオアイにあるサン・アグスティン教会、通称パオアイ教会を見学。18 世紀初めに完成したこの教会とベルタワーは、フィリピンのバロック様式教会群の 1 つとしてユネスコ世界遺産に登録されている。教会堂は両側面と背面が 24 の大きなバットレスに支えられ、高さはそれほどでもないが全体として重厚感がある。但し、側壁の漆喰が修理の後かとても白っぽく見える。技術的なことはわからないが、もしや手荒な修理の結果、世界遺産登録から外されるのではと心配になった。ちょうど結婚式が行われており、クリスマスの休みでもあり教会はフィリピン人観光客でごった返していた。空港近くのホテルに戻る前にラワグ

パオアイのサン・アグスティン教会

の町を訪れ、聖ウィリアム大聖堂とスィンキング・ベルタワー（Sinking Bell Tower）を訪れる。ラワグの町のシンボルであるが、ベルタワーが建つのは砂地の地盤のようで、タワー全体が沈下しつつあるためこの名がある。この日のバスの中でガイドさんが、農民の唯一の娯楽である賭け事について話してくれた。それはサボング（sabong）と呼ばれ、鶏の雄を戦わせる競技闘鶏である。しかし、最近人気はカジノに取って代わられたようである。かつてフィリピンでは、闘鶏の他にスペイン・バスク地方由来のハイアライ（Jai alai）が賭け事としても人気があったが、残念ながらそれも徐々にすたれてしまった。賭け事は男性だけが楽しむものではなく、既に 16 世紀末にマニラのフィリピン人とメスティーソの女性が大金をかけてカードで遊ぶことを「大きな気晴らし」にしていたとの記録がある[17)]。

翌 29 日はバギオまでの長い行程である。途中世界遺産の町ビガンを訪れる。ビガンの町に入る前に、1591 年に建てられベルタワーでも知られるバンタイ教会に立ち寄る。ベルタワーは見張り用の塔であったが、現在は観光客に開放され塔の一番上に上るとビガン郊外が見渡せる。その後ビガン市内に入るとイロコス・スール（南イロコス）州庁舎前にバスを止め、フアン・デ・サルセードの名を冠したサルセード公園に入る。サルセードは 16 世紀後半に活躍したスペインの探検家であるが、ビガンを中心とした南イロコスを征服支配し、最後の征服者（último de los conquistadores）とも呼ばれている。夜にはライトアップされる噴水で有名な公園であるが、ここで 2 体の銅像に迎えられる。1 つは、ビガン出身で 1948 年から 53 年まで第 6 代フィリピン大統領を務めたエルピディオ・キリノの立像であり、もう一体はホセ・リサール像である。先述のように、キリノは任期の最後の年に、いまだ反日感情の強いフィリピンで、モンテンルパ刑務所に収容されていた日本人戦犯 105 人に恩赦を与え日本への帰国を許したことで知られる。そのこともあり、キリノの顕彰碑が 2016 年に日比谷公園に建立される。そこには、この恩赦が、フィリピン議会の同意の

ホノルルのホセ・リサール立像

必要な大赦ではなく、行政上の特赦であったと記されている。当時の反日感情からして、議会での大赦の承認は難しく、特赦はマニラ市街戦で妻と子供達を日本人に殺害されたキリノのキリスト教国の長としての個人的対応であった。ところで、日比谷公園にはホセ・リサールの像もあるが、実は彼の像は、オーストラリア、米国、中国、ドイツの他、宗主国スペインのマドリードにも建てられている。また、ハワイのホノルルでは、中華街の近くにある孫文像と川を挟んで並ぶかたちで建てられている。

我々は、サルセード公園を通り抜けてセントポール・メトロポリタン大聖堂の正面に立つ。北部ルソンで最初の教区が、アロンソ・デ・アルバラード修道士が指揮するアウグスティヌス修道会宣教師達によってこのビガンに設置されたのは 1575 年 4 月であった。ミサが始まろうとしていた大聖堂の見学を終え、スペイン様式の建物が立ち並ぶビガン歴史地区に出る。第 2 次世界大戦の戦禍を免れ 1999 年にユネスコ世界遺産登録された頃の写真と比べると、随分観光地化されたもので、通りは観光客でごった返していた。しかし、意外とアジア系の観光客は少なく、クリスマスから新年にかけての休日期間ということもあり、フィリピン人の観光客が多かった。続いて訪れたのが、州庁舎の裏にあるブルゴス国立博物館である。国立博物館であるが、独立運動の殉教者でカトリック聖職者であったホセ・ブルゴスの生家を博物館に改修した建物で、イロコス州の工芸品等が飾られ地方色豊かな博物館である。ホセ・ブルゴスは、1872 年に勃発したカビーテの反乱に加わったとしてスペイン官憲に捕られ、マニラにおいて処刑されている。独立運動においては、ホセ・リサールもブルゴスの影響を受けたと言われる。

ビガンの調査を終え、次の目的地であるバギオに向かう。途中サンタ・マリアの町で、ヌエストラ・セニョーラ・デ・ラ・アスンシオン教会に立ち寄る。通称サンタ・マリア教会。南イロコス州サンタ・マリアの教区教会であるが、バロック様式教会群の 1 つとして 1993 年にユネスコ世界遺産に登録されている。これまで各国で世界遺産に登録され観光客で溢れた観光地を見てきたが、これほどまでに閑散とした世界遺産もめずらしい。もともとフィリピンを訪れる外国人観光客の多くは、フィリピン中部のビサヤ諸島の島々が目的地で、ルソン島北部に位置するイロコス州の教会にはそれほど興味を抱かなかったのであろう。丘にそびえる教会に至る長い石の階段を登ると、教会のバットレスに白く描かれたマリア昇天のレリーフが目に飛び込んでくる。この教会のバットレスには重厚感があり、教会というよりは要塞のようでもある。スペインの征服期当初から、単に礼拝所としての機能だけでなく、南イロコス地域の見張り台、要塞の役割も果たしていたことがわかる。教会裏のテラスからは、遠くに山々が見えるが、その向こうがルソン島北部を縦断するコルディレラ・セントラル山系である。この教会はちょうどこれらの山々と海岸線の中間地に位置し、ビガンとともに南イロコスでスペイン統治の中心的役割を果たしていたと考えられる。有名な 8 角形のベルタワーは 4 層を誇り、典型的なバ

サンタ・マリアのヌエストラ・セニョーラ・デ・ラ・アスンシオン教会。
マリア昇天のレリーフが見える

ロック様式のタワーである。

サンタ・マリアからバギオへは、まだかなりの道のりが残る。しばらく進むと、右手にラ・ウニオン州のサン・フェルナンド（後述のパンパンガ州のサン・フェルナンドとは区別）の町が見えてくるが、町に入る前に、中国によるサンゴ礁での人工島建設と軍事施設化で今もきな臭い南シナ海が見える。そして、サン・フェルナンドからさらにバスの進行方向の先に目をやると、リンガエン湾が遠方に薄っすらと見える。リンガエン湾は 1941 年 12 月に日本軍がルソン島を攻略する際に上陸した地点であるとともに、1945 年 1 月にはマッカーサーがルソン島に反攻する時に選んだ上陸地でもある。バスはバウアンで左に曲がり、いよいよバギオまでの山岳道路である。バギオに向かわずバウアンからもう少し南下しておれば、1978 年の NHK 大河ドラマ「黄金の日日」の主人公で堺の貿易商であった呂宋（るそん）助左衛門（本名は納屋助左衛門）が、琉球への途中に船の難破によって漂流し辿り着いたアゴオ（Agoo）がある。バウアンから東にしばらく進むと、太平洋戦争末期の激戦地ナギリアン・ロードに入る。リンガエン湾に荷揚げした大量の物資を背景にバギオに攻めあがる米軍に対し、敗走日本軍が必死の抗戦をしたところと聞く。バギオに着いた頃には、どっぷりと日が暮れていた。マニラの酷暑に堪えかねたアメリカ人によって 20 世紀になって開発が進んだバギオには、以前は夏の期間避暑のためにマニラから政府機関が移転してきたこともあった。バギオは、年間の平均気温が 20 度ほどの清潔な高原都市のイメージがあるが、暗くなって遠くは見えない中で交通量は多

く、話によると大気汚染問題があり犯罪率もかなり高い大きな都市である。翌朝、山の上にへばり付くように重なり合って建てられている家々を見ていると、バギオの都市問題が見えたような感じがする。バギオは現地語で嵐を意味し、本来ルソン島は台風がしばしば通過する地域である。このような気候条件の山の側面に、スラムのごとく家が建てこむ情景を見ていると、地震や地すべり等の自然災害が心配になる。バギオでは 1990 年にマグニチュード 7.8 の大地震が起こっているが、その後バギオでは 5 階建て以上の高層建築物は無くなったとの話である。

30 日にバギオでまず訪れたのが戦没者追悼慰霊碑（英霊追悼碑）である。日比両国の戦没者を追悼する日比親善のシンボル的慰霊碑である。隣の丘の上に、フィリピン方面を作戦地域とする帝国陸軍第 14 方面軍の病院があった。この辺りは昔日本人が持ち込んだと言われる松の木が多く、バギオは the city of pines とも呼ばれる。日本人と言えば、現在バギオで英語を学ぶ学生数はセブ島の次に多いらしい。以前は、日本人退職者が気候的に過ごし易いバギオの地に終の棲家を求めたが、その後のフィリピンの物価上昇で経済的にも苦しくなり夢が途絶える事例が多くなった。フィリピンへの日本人移民は北部のルソン島と南のミンダナオ島に向かった移民の 2 つに大別されるが、ミンダナオ島に渡った日本人移民は大きな成功を収め、現地の女性と結婚してミンダナオ島の社会に溶け込み、財を成して富裕な生活を送る者も多かった。しかし、太平洋戦争によって、彼らが獲得した財産は全て失うこととなる。ルソン島の日本人移民と言えば、おそらく一番有名な事例は、バギオに通じる道路の建設に加わった日本人労働者であろう。1898 年、米軍のケノン少佐は、ブエド川沿いにバギオに通じる道路建設を開始するが、当初雇った現地人や中国人では仕事に進展が見られず、1903 年になると勤勉で知られる日本人労働者約 1500 人を主に九州から雇い入れる。そして、事故や疫病等で約半数の死亡者を出しながらも、1905 年に道路はついに完成に至る。太平洋戦争中日本軍は、ケノン・ロードを道路のあるベンゲット州にちなんでベンゲット道路と改名する。1944 年に日本軍が、マニラの司令部を撤収してバギオに司令部を移す際に使ったのがこのベンゲット道路である。ケノン・ロードの建設に携わった労働者の中には、道路完成後も現地に残り、現地の女性と結婚してフィリピン社会に貢献する者も多く存在した。このような現地に溶け込みフィリピン人と結婚した日本人の子供達は日系メスティーソと呼ばれ、反日感情の激しい戦後は人里離れたところに暮らし、貧困にあえぐ者も多く見られた。バギオを語るに、戦後このような日系メスティーソの救済に奔走した日本人カトリック修道女テレシア海野の存在を忘れてはならない。還暦を迎えた 1972 年にバギオに赴任した海野は、日系人の救済や旧日本兵の遺骨収集等のみならず、フィリピン社会にも大きな貢献を果たした。

ところで、バギオには、少数民族イグロット族の血が入った人々が多い。見事な棚田を作ることでも有名な農耕民族であるが、かつては首狩りの風習を持っていた。イグロット族はコル

ディレラ山系に居住する山岳民族であり、先祖は同じく首狩りの風習を持っていた台湾の山岳民族である高砂族を想起させる。イフガオ州には「天国への階段」と称されるバナウェの棚田を含め世界遺産にもなっているコルディレラの棚田群があるが、それらを作ったのはイフガオ族である。このイフガオ族のルーツは結局イグロット族であるが、ガイドさんの話では、イフガオ族は自分たちを独立した存在とみなし、イグロット族と同族であることを認めないようである。次に訪れたのは、米国植民地時代の 1908 年にフィリピン総督（Governor-General of the Philippines）の住居として建てられたザ・マンション或いはマンション・ハウスと呼ばれる豪奢な建物と庭園である。正面は英国のバッキンガム宮殿を模して建てられたと言われるが、どうやら事実ではないらしい。戦後はフィリピン大統領がバギオを訪れた時に宿泊する夏の宮殿であり、同時に首都が夏の間マニラから移転してきたという意味ではサマー・キャピタルである。続いてマインズ・ビュー・パークを訪れる。マインズとは鉱山の意味で、かつての鉱山跡と遠方に美しい山並みを見ることができる。年末をバギオで過ごす人は多いのか、外国人観光客だけでなくフィリピン人観光客で展望台と入口の土産物屋街はごった返していた。

早めの昼食を終え、バスはマルコス・ハイウェイを通って山を下りマニラを目指す。今日ではケノン・ロードに代わって殆どの車はより整備されたマルコス・ハイウェイを利用するようである。正式の呼び名はアスピラス・パリスピス・ハイウェイであるが、通称マルコス・ハイウェイ。この道は、バギオとリンガエン湾に面する前述のアゴオを結んでいる。バスは途中プゴの町から南に下り、マッカーサー・ハイウェイに乗ってパンパンガ州に入る。すると遠くにアラヤット山が見えてくる。アンヘレス市あたりで幹線道路を降り、旧クラーク米空軍基地跡にバスを進める。基地は 1991 年のピナツボ火山大噴火によって流れ込んだ火砕流や火山灰によって大きな打撃を受け、復興には巨額の資金が必要であった。噴火の前から米国とフィリピンの間では基地使用期限の延長問題が持ち上がっており、在日米軍の駐留のために「思いやり予算」を組んでいる日米の関係からは考えられないが、当時フィリピンは米国から基地使用料（マルコス時代はフィリピンへの軍事援助の形をとっていた）を取っており、91 年には比米軍事基地協定が失効することになっていた。フィリピン側は基地使用料の値上げを求め、米国政府との間で交渉を続けていた。時は在比米軍の撤退をかねてから求めていたコラソン・アキノ大統領時代であるが、最終的に米軍の撤退に繋がる出来事がいくつか起こっている。まずマルコス時代終焉後の 1987 年に制定された革新的憲法は、18 条 25 項において、「比米軍事基地協定失効後、外国の軍事基地、軍隊、軍事施設を置くことは、上院による批准か国民投票の過半数の同意によって批准された条約によらなければならない」としている。

このような時にピナツボ火山の噴火があり、火山から 20 キロ離れたクラーク空軍基地機能はほぼ失われた。米軍としては、復興に莫大な費用がかかるクラーク基地を放棄し、ピナツボ

火山の南に位置し被害が比較的軽微であったスービック海軍基地の使用延長を望んでいたが、フィリピン上院はそれを拒否し、91 年 11 月に両基地のフィリピンへの返還が確定する。マルコス政権崩壊後のフィリピンの革新的流れやナショナリズム、基地問題に代表される反米感情等、様々な要因が米軍撤退の背景にある[18]。おそらくフィリピン政府は米軍が本当に完全撤退するとは考えていなかった節もある。しかし、当時は東西冷戦が終結し、現在問題になっている南シナ海での中国による人工島建設とその軍事化も想定されていなかった。フィリピン憲法の革新的部分はいまだに存在するが、近年フィリピンは中国との軍事的バランスの上からも、小規模ではあるが米軍の駐留を認めるようになった。但し、あくまでもフィリピン軍基地を米軍が使用するだけであるとして、米軍が主体となって基地を運用しているわけではないとの見解である。しかし、ドゥテルテ現大統領は、米中の間でバランスを取ろうとして米国には厳しい態度で臨む場合も多々ある。特に自身が進める強権的麻薬犯罪対策については、欧米の批判を受け付けない。たとえそれが、フィリピンの国家安全保障に関わる場合でもそうである。今年 2 月には、麻薬対策を指揮した元警察トップで大統領側近であったデラロサ上院議員の米国入国ビザ発給を米国が拒否したことに腹を立て、ドゥテルテ大統領は、フィリピン国内の米兵の法的地位を定めた訪問軍地位協定（Visiting Forces Agreement）の破棄を通知した。南シナ海領有権問題を前に、このような相互不信が米比相互防衛条約や米比軍事協力を制度面から強化する防衛協力強化協定にどのように影響するかは、今後注視する必要がある。地位協定が失効すれば、両国間に相互防衛条約はあっても、米兵はその時点でフィリピンでの法的地位を失うわけで、米国のこの地域での存在感の低落を招き、海洋進出を続ける中国を利することとなる[19]。

かつてのクラーク基地内をバスで巡ると、米軍のオフィスや住宅が半分火山灰の下に埋没していた様子がわかる。それでも、クラーク基地跡は、経済特別区として復興し、工業団地の中には日本の横浜タイヤ及びアデランスの工場や、米国のテキサス・インストゥルメントのオフィス等が点在していた。かつては PX からの流れの商品を買い求めるため、マニラから買い物客がクラークには来ていたようであるが、現在は工業団地と多くのホテルが建てられているとのことである。先述のクラーク国際空港もこのような復興プロジェクトの一環であるが、韓国から LCC を使って到着し特区内のゴルフ場、カジノ、免税店で楽しむ韓国人も多いと聞く。ピナツボ火山噴火のもう 1 つの悲劇は容易に忘れられてしまいそうであるが、ネグリト（Negrito、大洋州ピグミーとも呼ばれる）のアエタ族の罹災である。ピナツボの山中に暮らしていたアエタ族は、噴火によって多くの犠牲者を出すが、焼畑農耕と狩猟で生計を立てていた生活は根本から成り立たなくなった。

クラーク空軍基地跡を調査した後、バスは右手前方に再びアラヤット山を見ながらマバラ

カットに向かう。ここは最初の神風特別攻撃隊が発進したマバラカット飛行場があった場所で、アラヤット山の麓にかつて飛行場が整備されていた。マバラカットの東と西の 2 つの飛行場からは多数の特攻隊機が出撃したが、我々が今回訪れたのは東飛行場があった地域である。今日当時の滑走路の痕跡はないが、近くに Kamikaze East Airfield という大きな看板と、立派な鳥居、そしてその奥に特攻隊員の像が建てられていた。しかし計画によると、この像が建つ所には、今後神風神社なるものが建てられるらしい。マバラカットからの最初の特攻は、1944 年 10 月末に敷島隊を指揮してレイテ島タクロバン沖のスルアン島海域で米空母に体当たり攻撃を行った関行男大尉の名で知られる[20]。その戦果を朝日新聞は「神鷲の忠烈萬世に燦たり」と讃えている。こうして、軍神としての敷島隊ファイブ伝説が定着する。太平洋戦争の遺跡としてもう一か所訪れたのが、アンヘレスから少し南に位置するパンパンガ州の州都サン・フェルナンド市にある駅舎である。バターン半島とコレヒドール要塞での戦いで日本軍に敗れ投降した米軍及びフィリピン軍捕虜は、バターン半島南端のマリベレスから 102 キロを歩かされ、このサン・フェルナンド駅に到着するが、その間多数の死者を出した行進が後に「バターン死の行進」と呼ばれ、フィリピンにおける戦時日本軍の残虐行為の最たるものとして数えられるようになった。捕虜はこの駅舎から北のタルラック州カパスにあるオドネル収容所に鉄道で移送されていった。現在駅舎の中には当時の様子を物語る様々な展示がなされ、外では線路が無くなった広っぱで地元の子供達が遊んでいた。サン・フェルナンド駅の駅舎ができたのは、スペインの統治末期の 1892 年であるが、この頃のパンパンガ地方は、砂糖キビの生産によってサン・フェルナンド市の発展が加速していた頃であった。昨年の総合研究旅行で訪れた台湾の虎尾でも同じような砂糖キビ畑と軽便鉄道の情景を目にしているが、多くのフィリピン人が移住したハワイにおいても、同じ頃に同様の砂糖キビ畑や精製工場で働く多くのフィリピン人青年が目撃され、砂糖キビや人の

マバラカット平和祈念公園の特攻隊員像

サン・フェルナンド駅のかつての駅舎

輸送用に軽便鉄道が引かれていた。

マッカーサー・ハイウェイをさらにマニラに向かって進むと、道路の両側は米作地帯である。フィリピンの中でも、パンパンガ州は最も肥沃な土地と言われており、一人当たりの米の消費量が日本人の 2 倍と言われるフィリピンでは、重要な穀倉地帯である。市場で確認してもフィリピン米の品質はまだ改善の余地が大いにあるが、最近は米の輸入自由化問題で大きく揺れている。世界最大の米輸入国の 1 つであるフィリピンで、政府は 2019 年に米の輸入を原則自由化する「米関税化法（The Rice Tariffication Law）」を施行した。中間層にとり安価なベトナム米等は魅力的であるが、この法律に対する米農家の反発は大きい。この関税化法によって、フィリピンは WTO の指針に沿って、これまでの米の輸入数量制限をやめ関税化に舵を切った。これまでは米の生産者保護と米の自給率の維持が政府の大きな目標であり数量制限の根拠であったが、今後は関税化（約 35%或いはそれ以上）によって、安価で品質の良い米の流通を求める消費者の要望に応えることが優先される[21)]。

フィリピンの道路を走っていてもう 1 つ印象に残るのが、東南アジア諸国に一般に言えることであるが、日本車の多さである。圧倒的な数を誇るのはトヨタ車であるが、それに加え三菱、いすゞ、ホンダ、日産車も加わり、外国車でたまに走るのが現代とフォードくらいで、ドイツ車は殆ど見かけない。フィリピンは人口増加率が高く、特に若者の人口比率も高いが（平均年齢は 24 歳）、就労の機会が少なくて若者を中心に多くのフィリピン人が海外へ出稼ぎに向かう。そのため、製造業不毛の地と言われるフィリピンであるが、最近トヨタ自動車と三菱自動車で

旗艦車種の部品の現地調達率が 5 割を超えたとの報道があった。しかし、素材や鋼材は輸入が頼りで生産コストがかさみ、さらに国内市場が低迷していることもあり、東南アジアの他の自動車生産先進諸国の背中は遠い。ところで、新型コロナ禍の影響でフィリピンにとって重要な外貨獲得源である出稼ぎ労働者の本国送金は、4 月現在で前年比約 2 割減となり、フィリピンは重要な財源を失うこととなった[22)]。

翌 31 日は旅行最終日。まずはフィリピン中央銀行の隣にあるメトロポリタン美術館の守衛と掛け合うことになった。この日は美術館閉館日であるが、目的は美術館ではなくその裏にあるサン・アントニオ・アバド要塞（Fuerte de San Antonio Abad）の調査である。この要塞はマニラとカビーテを結ぶルートの防衛のため 1584 年にスペインによって建設された。ヨーロッパで 7 年戦争が戦われている中、1762 年に英国がマニラに攻め入り占拠するマニラの戦いの初戦で、英国がスペインから奪い取った砦である。英国軍はこの要塞を起点として、スペイン軍本隊が駐留するサンティアゴ要塞を攻め、約 1 年半にわたってマニラとカビーテを占拠することとなる。残念ながら、守衛との掛け合いは失敗に終わり、今回は脇道から要塞の一部を撮影するだけに終わった。

その後向かったのは、パッシグ川の北、チャイナタウンの北西に位置するトンド地区である。かつてはスラム街スモーキーマウンテンがあったことでも知られ、フィリピンの貧困を象徴する地区である。昔は一漁村であったが、その後ゴミ投棄場となり、そのゴミからリサイクル可能な廃品を回収するため貧民が住みつき地域はスラム化する。その後ゴミ集積場はケソン市の

草木が生えるかつてのゴミ集積場スモーキーマウンテン

パヤタス地区に移転しているが、かつてのトンド地区のゴミ捨て場跡の小高い丘は、現在わずかに樹木が生えるもそのままの状態で残されている。トンド地区に住む住民はビサヤ地方から移住してきた人が多くを占め、かつては治安が悪く警察も入らない状況であった。スモーキーマウンテンから拾われたゴミは、汚れを落とされ中国人仲買業者によって引き取られていた。かつての治安の悪さを聞いていたのでやや警戒して入ったトンド地区であったが、屈託のない笑顔の子供達や親切な住人に取り囲まれ、様々な情報を集めることもできた。市営アパートは家賃約 800 ペソ（約 1700 円）で、25 年家賃を払い続ければ自分の所有物になるらしい。そのようなアパートの 1 つに住む家族を急遽訪れることになった。娘さんが岩手県二戸の介護施設で働いていることもあり、狭い室内には冷蔵庫等の電化製品が整っていた。この地区では比較的裕福な家庭であろう。道に出て何人かにドゥテルテ大統領評を聞いてみた。大方の意見は、ドゥテルテは厳しいが支持しているとのことで、やはり以前と比べ治安が回復され、生活も多少なりとも豊かになったとの実感があるのであろう。人気の政治家と言えば、ここトンド地区出身で 2019 年 7 月にマニラ市の新市長となったイスコ・モレノも、市民からの支持は絶大である。マニラの街の浄化や治安の向上とともに、貧困層の支援を打ち出していることも彼らの支持の背景にある[23)]。

帰国のため空港に向かう前に再度訪れたのがマニラ・ホテルである。日本軍の進攻前の 1941 年まで、ダグラス・マッカーサーもマニラ・ホテルの一室を得ていたし、マルコス時代は一時フィリピン政府がホテルを所有していた。マルコスのハワイ亡命後に起こったクーデターで、マニラ・ホテルは 2 日間占拠されたが、その時のテレビ映像はいまだに筆者の記憶に残る。1986 年のエドゥサ革命でマルコス支配が終わり、コラソン・アキノ政権が樹立された数か月後に起きた、マルコスに忠実な軍人によるクーデター事件である。最後にホテルの資料室を訪れ、同ホテルに宿泊した各国の名士、名優の写真やマッカーサーの執務椅子等を見学し、午後ニノイ・アキノ国際空港から帰国の途に就いた。

---

1) Melissa Luz Lopez, ‘Bulacan airport deal signed, Construction to start December’, CNN Philippines, Sep. 18, 2019.
2) 渡辺孝夫『フィリピン独立の祖アギナルド将軍の苦闘』福村出版、2009 年、15-19 頁。
3) レナト・コンスタンティーノ『フィリピン・ナショナリズム論』鶴見良行監訳、勁草書房、1977 年、2-42 頁。
4) フィリピンの BC 級戦犯裁判の詳細については、永井均『フィリピン BC 級戦犯裁判』講談社、2013 年を参照。
5) Patrick O’Flanagan, *Port Cities of Atlantic Iberia, c. 1500-1900* (Aldershot, 2008), pp. 73-7.
6) Marciano R. de Borja, *Basques in the Philippines* (Reno & Las Vegas, 2012 Paperback), p. 84.
7) 永井均『フィリピンと対日戦犯裁判 1945－1953 年』岩波書店、2010 年。
8) 有山輝雄『日本の占領と新聞の「南方大進軍」』日本図書センター、『マニラ新聞』別冊。
9) フィリピンには 10 以上の大手財閥があるが、フィリピン航空を創業しサンミゲル・ビールでも知られるソリアノ、SM インヴェストメント、アヤラが 3 大財閥である。しかし最近では、国民の 80%前後の支持

率を維持するドゥテルテ大統領から、水道事業の経営権譲渡（アヤラ財閥）や放送免許の更新拒否（ロペス・ホールディングス）等、財閥は様々な脅迫めいた圧力を受けている。代わって力をつけているのが、大統領の地元ミンダナオ島ダバオ市の新興財閥である。『日本経済新聞』2020 年 3 月 17 日。マルコス、アキノ、ラモスの 3 大統領下における財閥と政治の関係については、小池賢治「フィリピンの財閥 ―財閥の政治化現象とその帰結」『発展途上国のビジネスグループ』アジア経済研究所、1993 年、189-212 頁を参照。

10) スペイン植民地時代のフィリピンでは、現地人、現地人と結婚したスペイン人や中国人を指すメスティーソ（中国人の場合はサングレイとも呼ばれる）、クリオーリョ（criollo）と呼ばれるフィリピンで生まれたスペイン人、イベリア半島の本国で生まれたスペイン人ペニンスラール（peninsular）のような区別が存在した。Vicente L. Rafael, *The Promise of the Foreign Nationalism and the Technics of Translation in the Spanish Philippines* (Durham, NC, 2005), p. 18.

11) John Leddy Phelan, *The Hispanization of the Philippines* (Madison & London, 1967), pp. 106-7.

12) 中西徹他『アジアの大都市 4 マニラ』日本評論社、2001 年、25、32-34 頁。

13) 菅谷成子「スペイン領フィリピンにおける中国人移民社会の変容」『人文科学論集』（愛媛大学）22、154 頁。

14) 菅谷成子「島嶼部華僑社会の成立」『東南アジア近世国家群の展開』岩波講座東南アジア史、第 4 巻、2001 年、213、226-7 頁。

15) アメリカのフィリピン統治期以降のムスリム・コミュニティの詳細は、渡邉暁子「マニラ首都圏におけるムスリム・コミュニティの形成と展開」『東南アジア研究』46 巻 1 号、2008 年 6 月、101-144 頁を参照。

16) 川島緑「フィリピン・ムスリム研究」『東南アジア研究』37 巻 2 号、1999 年 9 月、194-209 頁；川島緑『マイノリティと国民国家―フィリピンのムスリム』山川出版社、2012 年。

17) アンソニー・リード『大航海時代の東南アジア 1450-1680 年』平野秀秋/田中優子訳、法政大学出版局、264 頁。

18) 詳細は、中野聡『歴史経験としてのアメリカ帝国：米比関係史の群像』岩波書店、2007 年を参照。

19) 伊藤裕子「比米安全保障関係と南シナ海領有権問題をめぐるフィリピンの対中政策」『China Report』vol. 15、日本国際問題研究所。

20) 森史朗『敷島隊の五人：海軍大尉関行男の生涯』上下巻、文藝春秋、2003 年。

21) Annette M. Tobias, 'The Philippine Rice Tariffication Law: Implications and Issues', FFTC Agricultural Policy Platform report.

22) 『日本経済新聞』2019 年 12 月 13 日；Andrew England & Leke Oso Alabi, 'Remittance flows expected to plunge more than $100bn', *Financial Times* (22 April, 2020)。

23) 『日本経済新聞』2020 年 1 月 22 日夕刊にモレノ市長に関する記事がある。